

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (16)

佐原の街と

天保水滸伝の里に行く



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (16)

佐原の街と

天保水滸伝の里に行く

木村 進

ふるさと“風”の会

(1) 佐原の大祭(秋祭り)

千葉県香取市の「佐原の大祭」秋祭りは10月中旬の3日間行われます。佐原の大祭は7月に行われる夏祭り(小野川の東地区と八坂神社の祭典)と、10月に行われる西側地区と諏訪神社の祭典)の2回に分けて行われています。3日間の祭りの初日に訪れました。

しかし平日のため山車の競演もなく少し寂しい感じでしたが、小野川沿いに多くの江戸時代を感じさせる家屋が多く残っていて、川と柳に祭りがしっくりと絡み合っその風情を感じさせてくれました。



佐原は江戸時代に開けた水運と伊能忠敬で有名です。

また近くに香取神宮があり、多くの参拝客も訪れ、賑わいました。

今は利根川に注ぐこの小野川沿いに立ち並ぶ家並みの風情が訪れる人の心を引きつけています。

初日のため、山車は乱引き（各山車が勝手にバラバラに引き回す）のみだそうです。中日の土曜日は14台の山車が揃い、総踊りと山車巡行が行われます。

踊りは佐原囃子ですが、盆踊り調のもので、笛太鼓で音頭を取ります。石岡囃子のような狐やおかめひょっとこ踊りは見られませんでした。各山車は見事な彫刻が施されていました。

やはりこれをみると石岡のお祭りの幌獅子は独特です。

山車には大人しか乗っていません。

山車の車の中は結構狭そうです。真中は上の大人形をしまう場所です。これは石岡の山車も同じですが、おかめ・ひょっとこ・狐などが踊る舞台はなく、山車周りに設けられた木組みの棧に腰かけて笛・太鼓などを演奏します。



また山車の車輪前に太い丸太が備えられており、これを車輪脇に差し込ん

で、テコの原理で山車を持ち上げて車輪の向きを変えます。
石岡の山車は台車の上の舞台が回転できる構造になっていますが、こちらは回りません。山車を動かすにはこの丸太を差し込んで、浮かせながら若者たちが力で回します。また丸棒を差し込んで回すものもあります。この山車を「の」の字を書くようにクネクネと動かすのを「の字廻し」というそうで、山車巡行などの時の見ものになっています。



女性は頭に丸い縄を結ったような輪を載せています。

男姓は縄の輪でハチマキをし、女姓はこのように頭に載せるのでしょう。これも伝統なのでしょうか。

初日の今日は学校が休みではなく、子供たちも小さな子供だけでした。

明日は賑やかになるのでしょう。

屋台の店はほとんど出ていません。そのかわりに昔からある老舗のお店などが色々な土産物や食べ物を売っていました。

小学生は下校の時間でした。毎日この町並みを見て生活しているのです。大きくなったら外に出ても、思い出としてここに戻ってきたくなるのでしょうか。

祭りの中日のお昼頃に14台の国指定重要文化財に指定されている山車が忠敬橋の通りに集結していろいろな行事が行われます。

秋祭りに使われる山車は14台ですが、江戸時代の造ったものが今も使われているわけではありません。

これだけ激しく使いますし、火災や落雷などもあり多くは明治中頃以降の製作です。ただし、山車上に掲げる額等は江戸のものをそのまま使って伝統を継承しているものもあるようです。

祭りは300年の伝統（山車まつり）があるとか、佐原囃子は400年くらいの伝統があるとも言われています。

しかしそれらは時代で変化してきたものだと思います。

どこの祭りも明治の中頃に昔からの祭りを、その時の商人たちの意気込みを込めて復活したものばかりです。川越の祭りなども同じです。

私はこれらの伝統に意義を見出すのではなく、復活させた人たちの意気込みとその情熱に熱いものを感じます。

この地は、平成の大合併以前は佐原市と言ってきたので私の頭も佐原市とのイメージでいましたが、小見川町などと合併して香取市になりました。やはり香取神宮も有名ですが、水郷の街「佐原（さわら）」の名前が市町村名から消えるのは寂しいです。

この小野川沿いの小江戸といわれる街並みは、川越などとはまた違った風情が残り、貴重なものと思います。

江戸時代に利根川は銚子の方に流れをつけかえられて、霞ヶ浦水運が発達し、水戸からも石岡・土浦からも江戸への荷はすべて、ここ潮来や佐原などの場所を経て利根川、江戸川へ経由して運ばれていました。

そのため、酒、醤油などの産業や船荷の業者、木材などを扱う人々が行き交い、このためのたくさんの商人たちが行き来したのでしょう。「小江戸」、「江戸勝り」などと言われる所以です。

そして、祭りもこの人たちが盛り上げてきたように思います。

佐原の大祭は7月に小野川の東側にある昔からの本宿を中心として伝統の山車10台が街中で引き回しが行われます。また10月の秋祭りには西側地区の新宿を中心に14台の山車が引き回されます。

夏祭りは古くからの宿場である本宿にある「八坂神社」の祭典です。

元々は諏訪山天王台にあった牛頭天王社を江戸時代初期にこの本宿に移し、明治の廃仏毀釈の時に「八坂神社」に改名しています。

しかし、今のような祇園祭がいつの頃から始められたのかははっきりしません。八坂神社の祭典としては、元禄15年(1702)までには6月10日(旧暦)に浜下りの神事及び6月12日に祇園の神事が行われていたと言われています。

しかし、現在のような山車がたくさん揃うようになったのはいつ頃なのか？あまりはっきりしません。

江戸でも祭りに山車が使われていたが、明治になって路面電車の発展で山車が廃止され、神輿に変わって行きました。そのため江戸の人形師などが仕事を失い、佐原などに活躍の場を見いだしていたようです。

一方秋祭りの新宿の方は伊能家が酒業などの商売で財を成し、この新宿の発展を支えてきたと言われており、諏訪神社は伊能家の氏神を奉納する神社と思われます(祭神は建御名方神)。

こちらの社殿は嘉永6年(1853)の造営だそうです。

秋祭りに使われる14台の山車を見てみると、江戸時代に製作されたとするものが2台、明治時代が8台、昭和が4台です。

神社に伝わっているお祭りというのはどこもあり、この祭りが大きくなったり、小さくなってしまったりはある程度時代背景もあり致し方ないでしょう。この祭りを見ると明らかにいわゆる祇園祭です。



小江戸とか小京都などという言葉は魔法の呪文と同じですね。

この水郷佐原の街を、じっくりと見てみると、私には江戸後期から、明治にかけての産業の発展が見えてきました。

潮来などがアヤメの咲く小舟での遊覧などが観光客で賑わっていますが、江戸から明治時代に小唄や日本舞踊などの唄が潮来節として広まったことを思い浮かべて、この地をまたいつか調べても見たいと思います。

佐原の街中の道路はどこも狭く、電線も地中化されていないので、山車を